

チ ョ ー サ ー の 英 語 *

—— 発音と形態 ——

A. O. Sandved 著

[Ⅲ]

(共訳)

田 中 俊 也・三 輪 伸 春・小 城 義 也

佐 藤 哲 三・松 元 浩 一

(1990年10月1日 受理)

代名詞 (57頁)

人称代名詞

下の一覧表はチョーサーの人称代名詞を、もっともよくみられる綴りで表したものである。

単 数	主 格 (主格形)	対 格 (目的格形)	第1属格 (所有形容詞形)	第2属格 (所有代名詞形)
1人称	I, ich	me	my, myn, myne	myn, myne
2人称	thou, thow	thee, the	thy, thyn, thyne	thyn, thyne
3人称				
男 性	he	hym, him	his	his
女 性	she	hire, hir, hyre	hire, hir, hyre, here	hire, hires
中 性	it, hit	it, hit	his	(his)? ⁶
複 数				
1人称	we	us	oure, our	oure, oures
2人称	ye	yow, you	youre, your	youre, youres
3人称	they	hem	hire, hir, here	hirs

上の表が示すように、チョーサーの英語の人称代名詞の体系にみられる屈折の型は、現代英語と基本的には同じである。しかし相異も多少ある。そのほとんどは表から直接読みとれるだろう。現代英語と同じく、チョーサーの英語の人称代名詞は、人称 (1, 2, 3人称), 数 (単数, 複数),

格(主格, 対格, 属格)の区別がある。さらに, 属格は第1属格, 第2属格と呼ばれるものに分けられる。表の中の選択形(alternative designations)から明らかなように, 第1属格は, 一般に形容詞の働きを持つのに対し, 第2属格は名詞的働きを担っている。4つめにあげた性(gender)は3人称単数にみられ, 男性, 女性, 中性に区別される。

上の表では分からないチョーサーの英語と現代英語の相異は, 数に関するものである。主格では, 単数 I, ich, 複数 we, 単数 thou, thow, 複数 ye 等の区別がある。1人称, 2人称の第1, 第2属格には, my, myn, myne; thy, thyn, thyne が見られる。これらは, それぞれ, 単一人物 I, thou を指すので, 単数形である。しかし, my lord, myn ye, thy servant, thy hors のような構造における my, myn, thy, thyn は, 単数名詞, すなわち単一の主人, 目, 従僕, 馬等を指示する名詞を限定するために使われるので, やはり, 単数形である。ところが, myne eyen, thyne armes における myne, thyne は単一人物を指示するという点ではやはり単数であると言えるが, 同時に, 複数名詞, すなわち(2つの)目, 腕を指す名詞を限定するので, 複数である。(さらに, 形態の上でも, 複数形容詞にも使われる接尾辞 -e を持つことから複数形だと分かる)

第2属格についても同様の区別がつけられる。たとえば,

Thanne oughte she be *myn* PF437 に対して,

Thise been the cokke wordes, and nat *myne* NPT3265。

第1属格の複数形 myne, thyne には厳格な使用上の制限があり, 母音ではじまる語の前では, 語末の -e は通常脱落するので, [myne, thyne の使用は]書記素レベル[綴り字上]に限定される[つまり -e は発音されない]。

チョーサーの英語と現代英語との, 人称代名詞の体系の, 他のちがいは, 57頁の表でわかるであろう。

その中で, もっとも著しいのは, 以下のとおりである。

(i) 第1属格(hire, oure, youre)と同じ形を持つ第2属格としての hire

For this was desir and *hire* also MillT 3407

ただし3人称単数, 女性では, hires がふつうである。

I wol ben *hires* PF588

第2属格としての oure。

Oure is the voys PF545

1人称複数では oures がふつう。

Al this gold is *oures* PardT 786

第2属格としての youre, ただし2人称複数では youres がふつう。

Whan ye ben his al hool, as he is *youre* Tr 2. 587

Hoom to myn hous, or elles unto *youres* PardT 785

(ii) 3人称単数中性の属格に his を使うこと

That every sterre shulde come into *his* place

Ther it was first PF 68

In hire was everi at *his* reste PF376

its という形はチヨースーの英語にはない。

- (iii) 3人称複数の対格に *hem*, 属格に *hire*, *here* を使うこと。

So priketh *hem* nature in *hir* corages GenProl 11

チヨースーは時折、北部の人々の話しことばを特徴づけるために *th-* ではじまる代名詞を用いることがある。

Thair bodyes RvT4172.

その他の語形については次のようなことが言えよう。

1. 1人称単数の *ich* /itʃ/ という形は比較的まれであるが、たとえば、MillT 3277には出てくる。
thou: thow, *hire: hir*, *thee: the* のような綴りの変更形については、相対的で、出現頻度について一般化することは困難である。事実、CT では非常に少ない *thow* という綴りが、CT とは異なる作品の成立過程をもつ PF では、唯一の綴りである。
2. 1人称、2人称単数の属格については、すでにいくらか述べたが、付記すべきことは、第1属格が *-n* を伴うかどうかは音韻的条件によって決まるということである。*my* と *thy* は /h/ 以外の子音ではじまる語の前に現れるが、*myn*, *thyn* は母音または /h/ ではじまる語の前に現れる。
たとえば、

my fader soule, *my* tale;

myn accord, *thyn* owene heed, *myn* herte, *thyn* hors。

1人称単数属格が呼格表現において、後置された形容詞として用いられる時は *myn* の形になることも注目される。

lemman *myn* MillT 3700,

Cosyn *myn* KnT 1081,

brother *myn* MerchT 1521.

3. 時折、脚韻において、ふつうでない、むしろ異常な形がみられる。例を少しあげると、Clerk's Tale 508行では、統語上、対格が必要なところに、2人称複数形 *yee* がみられる。

Ne I desire no thyng for to have,

Ne drede for to leese, save oonly *yee*,

(506行は *me* と脚韻を踏んでいる。) いくつかの写本は、単数形の *thee* をとり、統語上の要求を満たしているが、文脈上不適切である。508行を含むせりふの中で、Griselda は一貫して (ふさわしいと思われる) 2人称複数の代名詞を用いているが、同じ物語の106行では *yow* が主格として現れる。

For certes, lord, so wel us liketh *yow*

And al youre werk, ... that we
We myghte lyven in moore felicitee.

(チョーサーの英語では liken (=LIKE) という動詞を含む構文では、たとえば us が liketh の間接目的語で、主語が, you And al youre werk であることはまず疑いない。)

脚韻に生じる3つ目のふつうでない形は、3人称単数女性の対格, here である。この形は時折、(一般的に/æ:/を含む語との) 脚韻に現れる。たとえば KnT 1421, 2057, ClT 887, Tr 3. 267, 4. 612。here という綴りは、チョーサーのテキストの最良の写本では、SHE の対格形としてふつうでないばかりではなく⁸、この形では母音/æ:/もふつうではないだろう。また一般に考えられているように、もし語末の -e が脚韻で発音されたとすれば、その脚韻における here は2音節であると考えなければならないだろう。しかし、韻律上の証拠から、チョーサーのテキストでは通常の形, hire, hyre は単音節である可能性が大きい⁹。もっとも hire との脚韻が不完全なものという考えかたもできる。

4. 2人称単数の主格の前に、疑問文の動詞が来るとき、しばしば -ou/ow という形をとる。

knowestow (= 'knowest thou') MillT 3156,
shaltou (= 'shalt thou') MillT 3575,
woldestow (= 'woldest thou') NPT 3346.

この現象は先行する動詞と後続の代名詞との融合 (merger) として説明することができる。このような融合が常に起こるわけではないことは、PF163を見れば分かる。

Yit that thow canst not do, yit mayst thow se.

疑問/関係代名詞 (61頁)

WHO

代名詞 who は人称代名詞と非常によく似た屈折をする。

主格 対格 属格 (第1属格と第2属格という形態上の区別はない)

who whom whos:

who artow MillT 3766,

I noot to whom it myght displese NPT3260,

if a prest be foul, on whom we truste Gen Prol 501,

that fol (FOOL) of whos folie men ryme Tr 1. 532,

The formel on youre hond ...

Whos I am al PF 419.

ここでは、WHO の形態にまつわる統語論にはかかわらない。しかし、whom も whos も疑問詞としても関係代名詞としても自由に用いられるが、チョーサーの英語には明らかに関係詞の主格と

して用いられた *who* の例はないということには、注意しておいてよいだろう。ただし、いわゆる「総称関係詞 (generalizing relative)」, すなわち, 'anyone who, whoever' という意味の複合関係詞 *whoso* は頻繁に現れる。

whoso list it nat yheere ...

('Anyone who doesn't want to hear it ...') MillT 3176,

And *whoso* hit doth PF 517.

同様に, *who that* については, たとえば, PF 487行参照。

WHICH

who の屈折が人称代名詞に似ているのに反し, *which* は複数に *-e* を取るので, 形容詞に似ている。

a brooch ... On *which* ther was Gen Prol 161,

this Reve of *which* I telle ... Gen Prol 619,

He *which* that hath ... Gen Prol 836.

ただし,

whiche they weren Gen Prol 40,

herbes ... The *whiche* han NPT 2952,

paramours ... Of *whiche* the faireste ... Was NPT 2869,

bemes ... in *whiche* they blewe NPT 3399,

hennes ... *Whiche* were NPT 2867, etc.

多くの場合, 語末の *-e* は脱落したようであるが, 少なくとも時折発音されたのではないかということを示す, 韻律上の証拠がある。たとえば, 以下の3行を検討してみよ。

Women inowe, of *whiche* some ther weere PF 233,

Of *whiche* two Arcita highte that oon KnT 1013,

Lo, *whiche* sleightes and subtilitees MerchT 2421.

同じように, *which* (e) の前に *the* がある時, 語末の *-e* は時々書き表され, 明らかに時々発音された。

The *whiche* vice he hydde, as he best myghte WBT 955,

The *whiche* thynges troublen al this erthe WBT 363,

Toward the *whiche* daunce he drow ful yerne WBT 993,

Among the *whiche* pointz yspoken was KnT 2972.

ただし, この場合 *-e* のない形態もある。

... a parissh clerk,

The *which* that was ycleped Absolon MillT 3313,

しかし、

Hasdrubales wyf,

That at Cartage birafte *hirsself* hir lyf FranklT 1400,

Hath nat Lucesse yslayn *hirsself*, allas! FranklT 1405.

上のすべての場合、統語上、再帰代名詞の「対格」形もしくは「目的語」形が要求される。換言すれば、-self: -selve(n) の対立によってでは格の区別は表されえない。同様に、-f と -ve(n) の双方ともに「主語」の位置に見られる。

For he hadde power of confessioun,

As seyde *hymself*, moore than a curat Gen Prol 219,

He folwed it *hymselfe* Gen Prol 528,

I wol *myselfen* goodly with yow ryde Gen Prol 803.

-selves という形はチヨースーのテキストには見られない。

動詞 (63頁)

チヨースーの英語における動詞が屈折するのは、次のような文法範ちゅうに関してである。**時制** (現在と過去)、**数** (単数と複数)、**人称** (単数の場合だけが1, 2, 3人称の区別がなされる)、そして**法** (直説法、接続法、命令法)。さらに三つの**非定形** (non-finite) は、他と区別される屈折特徴をもつ。

非定形 (64頁)

非定形は以下の三つである。

1. 不定詞。有声の歯茎鼻音の接尾辞 -(e)n によって形成され、ふたつの異形態をもつ。

/ən/, 大部分の動詞とともに使われる。

/n/, 限られた数の動詞とともに用いられ、その動詞の語幹は母音で終わる。たとえば, don, fleen, gon, seyn (seye(n) もまた見られる)。

不定詞に付く接尾辞 -n は極めて頻繁に脱落する。そして/n/が消失したことによって、語末に残った -e はチヨースーの英語に存在する他の語末の/a/と同じように扱われる。即ち、語末の -e は韻律上の必要があれば脱落したり保持されたりする (上述16頁参照)。たとえば、次の例においては、韻律によって、二音節の不定詞形が必要とされるようである。

To *ride* by the weye doumb as a stoon Gen Prol 774,

To *telle* yow hir wordes and hir cheere Gen Prol 728,

And for to make yow the moore mury Gen Prol 802.

他方、以下の行の例に関しては、不定詞は単音節である。

He was on esy man to *yeve* penaunce Gen Prol 223,

Strong was the wyn, and wel to *drynke* us leste Gen Prol 750,

To *kepe* his foreward by his free assent Gen Prol 852.

2. **現在分詞**。接尾辞/*ing*/によって作られ、ふつう *-ynge* もしくは *-yng* と綴られる。

Syngynge he was, or *floytynge*, al the day Gen Prol 91,

a *whistlynge* wynd Gen Prol 170,

A daggere *hangynge* on a laas Gen Prol 392,

This Nicholas sat evere *capynge* upright MillT 3444,

abidyng Goddes grace MillT 3595,

... Was whilom *dewllyng* in a narwe cotage NPT 2822.

3. **過去分詞**。過去分詞の形成については後に詳しく扱う (65頁以下参照)。ここでは、以下のことを指摘することで十分であろう。

(a) 過去分詞は、しばしば接頭辞に/*i*/をとり、*y-* や *i-* (頻度は少ない) と綴られる。

ybore Gen Prol 378, ycome Gen Prol 77,
ycleped Gen Prol 376, ydrawe Gen Prol 396,
ypreved Gen Prol 485, ypunysshed Gen Prol 657;
ibounden PF 268, ibroke PF 282,
ifounded PF 231, imaked PF 677.

(b) 母音置換によって過去時制と過去分詞を作る動詞の過去分詞 (後述71頁以下参照) は、しばしば *-(e)n* と綴られる。接尾辞/*ən*/もしくは/*n*/をとる。

broken, songen, wonnen.

しかし、不定詞の *-(e)n* と同様に、この接尾辞もしばしば脱落する。その結果、非常に多くの動詞が過去分詞に二つの形をもつ。

dryven: dryve, writen: write;
bigonnen: bigonne; wonnen: wonne;
broken: broke; born: bore;
fallen: falle, etc.

(c) 接尾辞/*əd*/の付加によって過去時制と過去分詞を作る動詞の過去分詞 (後述参照) は時として付加的な接尾辞の/*ə*/をとることがあるが、通常このような過去分詞は屈折しない。

the diverse causes of nature that weren *yhidde* (Bo 1.m. 2.27),

Alle other dredes weren from him *fledde* (Tr 1. 463).

これから、チョーサーの英語における定形動詞の屈折形を幾分詳しく考えてみよう。

時制を表す屈折 (65頁)

伝統的に、動詞は大きく二つに分類されてきた。「強変化 (strong)」(あるいは母音交替) と、「弱変化 (weak)」(あるいは子音の付加) である。強変化は, write-wrote-written のように, 母音交替によって過去時制と過去分詞がつくられるもので, 弱変化は, 過去時制と過去分詞が, love-loved-loved のように屈折接尾辞を付け加えることによって作られるものである。この分類が, 現代英語では余り役に立たないことと, 本書の関心の中心が, チョーサーの英語と現代英語の比較ということにあることから, 伝統的な分類は本書では用いない。まず第一の基本的な分類は, 「規則動詞」と「不規則動詞」である。

規則変化による時制形成

チョーサーの英語の動詞の**過去時制**は, 動詞の語幹, すなわち不定詞から接尾辞 /ən/ や /n/ を取り除いた形に, -ed と綴られる接尾辞 /əd/ を付加することによって, 規則的に作られる。**過去分詞**も同じようにつくられる。

arryve ¹⁰	arryved	arryved,
assaye	assayed	assayed,
deme	demed	demed,
save	saved	saved.

語幹が歯茎破裂音で終わる added, hated のような語の場合, -ed は, 語幹とは別の音節を構成したことは疑いの余地はない。しかし, 今日, 過去と過去分詞の接尾辞がひとつの音節を構成しない動詞においても, 過去時制と過去分詞の /əd/ がはっきりと発音されることを示す確かな韻律上の証拠がある。たとえば, 次の例を考えてみよう。

And <i>bathed</i> every veyn in swich licour	Gen Prol 3,
Hir over-lippe <i>wyped</i> she so clene ...	Gen Prol 133,
But wel I woot he <i>lyed</i> right indede	Gen Prol 659;
And they were <i>clothed</i> alle in o lyveree	Gen Prol 363,
... Why that <i>assembled</i> was this compaignye	Gen Prol 717,
... That was <i>arrayed</i> in that same wise	NPT 3037.

他方, 規則的な過去時制の接尾辞の /ə/ と, 過去分詞の接尾辞の /ə/ が, 時折語中音消失したことを示す韻律上の証拠がある。(過去分詞の方が幾分頻度が高い。) もちろん, このことは過去と過去分詞の形成の「規則性」が, 書記法上のレベルに限られていることを意味する。たとえば, 次のような例を考えてみよう。

Wel <i>loved</i> he by the morwe a sop in wyn	Gen Prol 334,
For verray shame, and <i>blamed</i> hymself for he	

Had toold to me so greet a pryvetee	WBT 541,
And forth he <i>cleped</i> (/klept/?) a squier and a mayde	FranklT 1487;
This worthy lymytour was <i>cleped</i> (/klept/?) Huberd	Gen Prol 269,
For in his purs he sholde <i>ypunysshed</i> (/ɪpu niʃt/?) be	Gen Prol 657,
And <i>batailled</i> as it were a castel wal	NPT 2860.

時々過去時制の接尾辞は *-ede* と綴られ、韻律上の証拠によると、*-ede* の最後の *-e* は通常は発音されなかったことを示している。

So hootte he <i>lovede</i> that by nyghtertale	
He sleep namoore than ...	Gen Prol 97,
Therefore he <i>lovede</i> gold in special	Gen Prol 444,
And <i>warnede</i> hym befor of al his grace	PF 45.

しかし、また *-ede* は時として二音節であったことを示す韻律上の証拠も存在する。

And of manhod hym <i>lakkede</i> right naught	Gen Prol 756,
Who <i>peyntede</i> the leon, tel me who?	WBT 692,
As I his suster <i>servede</i> by nyghte	CIT 640.

不規則な時制の形成 (67頁)

/əd/ (綴りは *-ed*) を過去時制と過去分詞の形態素の「規則的な」(異)形態 ('regular' allomorph) と呼ぶことによって、当然、間接的にその他の全ての(異)形態を「不規則」と呼んできた。ここで、これらの中で最も大切なものを考えてみよう。以下に示される不規則な(異)形態の調査も、どの下位分類で示される動詞の一覧表も完全なものではないことは強調されるべきであろう。また、異形がいくつか共存する場合に、たとえ比較的たくさんの異形態が挙げられてきたとしても、そのような異形態の完全な一覧表を提供する試みはなされたことはない。不規則な(異)形態は、二、三の大きいグループに分かれ、それらは次の通りである。(1) **付加** (additives) — 接尾辞が語幹に付加される、(2) **置換** (replacives) — 語幹の母音が別の母音に置き換えられる、(3) **ゼロ異形態** (zero allomorphs) — 現在形、過去形、過去分詞形の形態上の区別がない。(付加は置換と結びついて生じることがよくある。)¹¹

付 加

1. 過去時制 *-de*, 過去分詞 *-d*

動詞の中には語幹に /də/ (*-de* と綴られる) を付加することによって過去時制を、 /d/ (*-d* と

